

ニュージーランドセミナーに参加して

甲斐重貴*

はじめに

学生時代に熱帯林業協会の北野という方の外国林業論という講義を聞いたが、その中で最も感
激したのはラジアータパインの人工造林地のスライドを見せてもらった時であった。わが国のよ
うに山岳地帯ではなく平地に広がる大造林地はまさにすばらしいの一言に尽きた。それ以降も彼
の地の林業についていろいろ話を聞く機会があり、また最近では林業統計研究会シンポジウムで
木平先生の8ミリを拝見し、いつかは現場をこの目でみたいと思っていた。そこに今回の企画で
あったので、早速申し込んだ。ただ当初は講演は全く予定しておらず気楽に構えていたところ、
京都府大でのセミナーで何かやるようにいわれ、無能な小生としてはテーマが見あたらず、大い
に悩み、一時は取り消そうと思ったが、ラジアータパイン林業を見たいという思いには勝てず、
月並みな表現であるが、まさに清水の舞台から飛び降りるつもりで今回のセミナーに参加させて
頂いた。しかし今では本当に貴重な経験をさせて頂いたと思っている。だいぶ前置きが長くなっ
てしまったが、以下に印象の一端を記して責を果たしたい。

1. やたらに牧野と羊が多かった

オークランド国際空港を出るとすぐ牧野と羊が目飛び込んできた。これがどこでもやたらと
目につき、ニュージーランドの景観と経済を代表するものと考えて間違いないように思われる。
統計によれば国土面積の約50%が牧野で、羊は7,000万頭といわれているが、まさにそのとお
りの印象であった。牧場の周りには通常防風林が造られていた。樹種構成はラジアータパイン、ユー
カリ、ポプラ、ダグラスファー、セコイア、オークなど、今回見た限りではすべて外国からの導
入樹種であった。かなり高齢に達した林分もあり、ヨーロッパ人の入植の歴史が感じられて興味
深かった。ところで青々と美しく見える牧野もひとたび足を踏み入れてみると羊の糞がやたらに
ころがっているのにびっくりした。考えてみると当たり前であるが、牧場を知らない小生にとって
新鮮な驚きであった。今回は確認しなかったが、ものの本によると、これらのために溪流が汚染
されているそうである。あれだけころがっていればさもありなんとと思われる。

2. ラジアータパイン林業の実際、特にラジアータパインの疎仕立と枝打ちの徹底ぶりを実際に

*宮崎大学農学部

この目でみることができ、感激した。

疎仕立と枝打ちの徹底ぶりについては、以前から読んだり聞いたりしてきたが、そのとおりであった。今回見学した主な森林は KAINGAROA と ASHLEY の二つであったが、いわゆる New crop と称される林分は全て枝打ちが行なわれ、また日本のスギ、ヒノキ林と比べると疎仕立で、各個体が伸び伸びと成長し、すぐれた木材となって行く様子を見ることができた。たとえば桐の林分を見ているようであった。一方、KAINGAROA では Old crop と称せられる林分も見学した。これらの場合、成長は優れているものの枝が多くかつ太く、更に幹曲がりの多い個体はかなりみられ、いかにも不良林分といった感じを呈しており、New crop 林分と対照的でこの間のニュージーランド林業技術の進歩をうかがい知ることができた。

地ごしらえが火入れによって行なわれていたことも彼の地の林業の特徴が窺え、印象的であった。反面、植栽が手植えで行なわれると知って意外に思った。幅の狭いショベルを用いて植えるそうである。きっと機械を利用しているのだろうと思っていた。もう一つ意外だったのは林地の地形が思っていたより平坦でなかったことである。平坦な区域もなかにはあるのだろうが、見学した限りでは現場は KAINGAROA でさえかなり起伏がみられる所があり(もちろん日本の普通の林地と比べるとはるかに小さかったが)、南島の ASHLEY では日本の林地とほぼ同様な地形のところまで造林されていた。広々とした大平原に機械力を駆使した林業を想像し、とてもかなわないと思っていたので実に意外に感じるとともにわが国の林業と似たところを発見したので、親近感を覚えた。またあのように人口が少なく土地の広いニュージーランドで、そのような所まで造林を進めたニュージーランド人の熱意に感銘した。

3. セミナー会場が立派であった。またニュージーランド人はプレゼンテーションが上手であった。

会場は全体がやや扇型になっていて後ろにスライドや映画専用の映写室がある。前方にはスライド及び映画用スクリーン、OHP 用スクリーン、スライド映写操作機能及び内部照明の調節機能を持った演台、OHP 投影装置が配置されている。すばらしいのは内装で、木がふんだんに使われ、デザイン、色調も良く、穏やかで快適な空間を作りだしていた。また内部照明が調節できるので便利であった。

このような会場にふさわしく、ニュージーランド人はプレゼンテーションが上手である。ユーモアを交えて巧みに話す。主に OHP を使用するが、わかりやすく見やすく作られており、また使い方が実にうまいのには本当に感心し、とても勉強になった。

4. FRI について

建物については、上空からの写真で見た時は大きく感じられたが、実際はそれほどでもなかった。ただ低層のものが多く、配置、動線は良く考えられており、コミュニケーション上はすぐれ

ているように思われる。人々はお茶の時間には食堂に集まり、コーヒーやお茶を片手に談論している。研究棟が高層化され、交流が不活発となったキャンパスで生活している小生にとってうらやましい光景であった。その他については時間がなく充分見ていないが、すばらしいと思ったのは周辺の実験林である。特にセンベルセコイアの巨大林分には度肝を抜かれた。日本のスギもあり、まあまあ成長をしていたが、事前にセコイアをみたせいか貧弱な気がした。

5. カンタベリー大学

クライストチャーチではニュージーランド唯一の林学の教育組織 (School of forestry) を持つカンタベリー大学を訪れた。ここのキャンパスは清潔で樹木が多く、またすばらしい庭園があり、折しも春で花木が咲き誇り、実にきれいだった。林学科の建物はその一角にあり、2階建てで規模は小さいが、日本の大学と異なり、構造材、内装材に木がふんだんに使われていた。内装材には在来のリム (Podocarpaceae)、カオリ (Agathis 属) などの樹種が多用されていた。この点は前述の FRI でもそうであり、ラジアータパインは主として構造材に集成材として使われていた。おそらく教育上、展示上の効果をねらったものだと思うが、ラジアータの国だから使用されているのはこの樹種だけだと思っていたので意外だった。

ところで学生は 60 人位入学するが 1 年後には半減するという。落第のためである。おぼつかない英語で聞いたことだから少し割り引いて考える必要があるが、わが国の現状と比較するとかなり厳しいように思う。当大学のホワイ教授に無理にお願いして林業経営学と測樹学の試験問題を一部見せて頂いたが、なかなか難しく、実力のある学生が育てられているようである。

6. ニュージーランド人など

短期間のことで会った人の数も限られているが、その範囲内で見ると、素朴でまじめな人々が多いように思う。ぎすぎすした感じやあくせくした感じはどの人にも見られなかった。人口が少なく、豊かな自然や資源に恵まれているためであろう。我田引水で申し訳ないが、わが宮崎県の人々の感じにやや似ているように思った。その他印象に残ったこととしては日本車が多かったことである。大衆車クラスはほとんど日本製であった。今更ながら日本とニュージーランドとの経済面での結び付きの進展及び日本企業の進出に目を見張らされたが、一方では貿易摩擦が憂慮される情景であった。

おわりに

まだまだ書きたいこと、書かねばならぬことがたくさんあるような気がするが、今回はこの辺で筆を置きたい。もっと時間をかけ、じっくりと見て回りたいものだというのが現在の率直な感想である。最後になりましたが、木平先生、奥様ならびに同行の方々にはたいへんお世話になりました。誌面を借りて厚く御礼申し上げます。